

「新型コロナ禍が明らかにしたこと」

新型コロナウイルス感染症が世界を覆っています。日本においても、一時のような急激な拡大は収まりつつあるように見えますが、今も感染は続いています。ワクチンがない以上、世界も日本もいまだ危険な状況にあることに何ら変わりありません。教会でも毎週の礼拝において、一日も早い新型コロナ禍の終息と、一人一人の命と健康が守られることを神に祈っています。

しかし、私たちは同時に、新型コロナ禍によって明らかになった、人間とこの世界の問題から目を背けてはなりません。確かにウイルスは怖いですが、けれども、感染者への差別・バッシングの現実を見る時、また、人々の命を守るために働いている医療関係従事者への理不尽な差別を見る時、コロナ以上に人間の心の罪の怖さを思い知らされます。

また、新型コロナ禍は、私たちの世界における命の不平等の現実をも露わにしました。今回のコロナ禍では、5月16日現在、30万人以上の方の命が失われましたが、亡くなる方は貧しい人々が多いそうです。特に公的健康保険制度が貧しい米国では、貧しい人は病院にもなかなか行けず、手遅れになるケースが多いとのこと。さらに、コロナ禍による企業の休業によって、経済的に弱立場の方々が、真っ先に解雇されるなど、そのしわ寄せを一番強く受けています。

すべての人間の命は神からの賜物であり（創世記2章7節）、命に優劣はありません。そして、人間は互いを尊重し、愛し合って生きるよう求められています（マルコ12章33節）。しかし、今の私たちの現実はどこからかけ離れています。たとえワクチンが開発され、新型コロナウイルス感染症が終息しても、それで真の問題が解決するわけではありません。

私たち一人一人が自分の心の罪を認め、神の御前に悔い改めると共に、利益優先の競争社会ではなく、互いに愛し合い、仕え合う共生社会を今後いかに築いて行くのか。神はそのことを私たち人間に問いかけておられるのではないのでしょうか。

2020年5月16日